

報道機関 各位

2020年9月15日

外国メディアでの外国人上司による日本人スタッフに対する
パワーハラスメント事件について

～取材・報道のお願い～

皆様の日頃のご活動に、敬意を表します。

民放労連放送スタッフユニオンは、放送関連で働く人なら誰でも入れる個人加盟方式の労働組合です。このほど、私たちの組合員が、ドイツ公共放送連盟（ARD）東アジア支局の女性特派員から執拗なパワーハラスメントを受けたことで、損害賠償を求める民事訴訟を起こしました。その第一回口頭弁論が9月18日（金）午前10時30分から東京地方裁判所415法廷で行われます。

ドイツ人女性の特派員は、2018年9月の赴任直後より、ARD東アジア支局ラジオ部門でプロデューサーとして約20年もの経歴を持つ組合員に対して、一方的な労働条件の不利益変更や虚偽事実を基にした卑劣で暴力的な非難や叱責、そして悪辣な嫌がらせなどのハラスメント行為をおよそ2年間にわたって日常的に繰り返しました。このため組合員は過呼吸症候群に陥るなど救急搬送や長期療養を余儀なくされました。

我々、民放労連放送スタッフユニオンは2019年7月から本件のバックアップをしています。書簡やオンラインを通して、ドイツ公共放送連盟（ARD）東アジア支局の統括担当である北ドイツ放送局本社（Norddeutscher Rundfunk、以下NDR）への直接の掛け合いを行ったり、北ドイツ放送局の代理人である、長島・大野・常松法律事務所（日本の四大法律事務所の一つ）と幾度にもわたり団体交渉を行ってきました。

しかし、北ドイツ放送局は本邦において2019年5月に成立したパワハラ防止法（改正労働施策総合推進法）は中小企業においては2022年からの施行だと主

張し、一切、本件を解決する努力をしませんでした。しかしながら、当該支局を統括している公共放送局の NDR は、正社員 3400 人、予算 10 億ユーロ（1250 億円）をもつ巨大な公共法人であり、NDR が属する ARD ドイツ公共放送連盟は、総予算年間 66 億ユーロ（約 8250 億円）という欧州最大のメディアです。

それにもかかわらず、北ドイツ放送局は本邦に 1960 年に東京支局を設立して以来、法人登記を行わずに事業を展開しており、法人未登記のために、現地採用社員に対する社会保険（厚生年金・健康保険）加入義務を怠るなど、本邦における法的規則を半世紀以上にもわたって軽視し続けてきました。

我々はこれまで行われてきた交渉を通して、北ドイツ放送局と当該支局の特派員ら、さらに総務担当者は、ドイツの思考ないしは北ドイツ放送局の思考で現地社員を扱い、抑え込もうとしている印象を強くもっています。法的義務がないにもかかわらず、来月から導入されようとしている就業規則についても、労働条件の不利益変更の側面が多分にあり、日本人スタッフ全員が抗議しているにもかかわらず、一切の譲歩もなく運用されようとしています。そもそも、その導入は日本人スタッフのみに適用されるものであり、民族差別とも言える人種間で異なる不公平な扱いが ARD 東アジア支局では横行しています。

北ドイツ放送局は当該特派員によるすべてのハラスメント行為を「業務指導」とか「業務命令」だと説明し、異議を申し立てる弊組合員に対して「不敬者」という烙印を押し、これまで弊組合員が提示してきた建設的で平和的な解決案のすべてを拒否し、労使関係の終了を条件にした金銭的解決のみを要求してきました。

弊組合員は公平で公正な対処を行わず、一方的に被告のみを擁護してきた北ドイツ放送局に対して、著しい失望の念を抱いていますが、約 20 年来、勤務してきた感謝の思いから当局を被告対象外とし、直接のハラスメント行為者である当該特派員個人のみを訴えました。

そのため、本件は個人のみを対象とした民事訴訟に過ぎません。しかし、予算の大部分が強制徴収受信料によって賄われている公共放送であるにも関わらず、

北ドイツ放送局は、今後も引き続き多額の弁護士資金を投入して被告を全面的に支援する見込みです。

我々としては、本訴訟を、外国人であっても、ハラスメントのない安心で安全な職場環境を目指す本邦において、その社会的規範を遵守する必要性が問われる重要な案件であると捉えています。

現在、北ドイツ放送局は様々な手段を使って、弊組合員を解雇に追い込もうとしているため、実名・顔出しによる記者会見を開くことはできません。つきましては、原告の氏名については一切公表しないでください。

第一回口頭弁論では、組合員も法廷で意見陳述を行う予定です。また、口頭弁論終了後には本件代理人の今泉義竜弁護士ならびに長谷川悠美弁護士、そして民放労連放送スタッフユニオン執行委員長 脇山恵と私、書記長の岩崎貞明が待合室にて皆様からの個別の取材に応じます。外国報道機関の記者様方には日英の通訳者をご準備させていただきましたので、どうぞご利用ください。

この事件に関心を寄せていただき、多くの皆様に取材・報道していただきたいと願っています。ご多忙の折とは存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

問い合わせ先：民放労連放送スタッフユニオン 書記長 岩崎 貞明
電話 03-3355-0461 メール info@minproren.jp

Power Harassment against Japanese employee
by foreign superiors at foreign media

Request for a news report

Minpororen, the National Association of Commercial Broadcasters' Staff Union, is a trade union open to anyone working in the broadcasting industry. Recently, a member of our union filed a civil action suit for damages because she was exposed to power harassment (bullying by superiors) by the East Asia correspondent of the Tokyo office of ARD (German Public Radio and Television). The first trial will take place on Friday, September 18, at 10:30 a.m. in Courtroom 415 of the Tokyo District Court.

Immediately after the German correspondent started work in September 2018, she routinely harassed our member, who has around 20 years of experience as a producer in the ARD East Asia office in the radio sector. The power harassment consisted, among other things, of unilateral changes in working conditions to the detriment of our member, vile and psychologically violent accusations and degradations based on false facts, and fraudulent harassment for almost two years. As a result, the union member required emergency transport, e.g. because of hyperventilation syndrome, and long-term medical treatment.

We, the Minpororen trade union, have been supporting the case since July 2019. We conducted direct negotiations with the headquarters of the Norddeutscher Rundfunk (NDR), on behalf of ARD in charge of the Tokyo Office, by letter and online, as well as numerous tariff negotiation sessions with Nagashima Ohno & Tsunematsu (one of the four major Japanese law firms) representing the Norddeutscher Rundfunk.

The NDR argued, however, that the Power Harassment Prevention Act (Revised Comprehensive Promotion of Labor Measures Act), which was passed in Japan in May 2019, would not take effect for small and medium-sized enterprises before 2022 and made no effort to resolve the case. However, the East Asia office in Tokyo is part of the public broadcasting corporation NDR, a huge public corporation with 3,400 permanent employees and a budget of 1 billion euros (125 billion yen). NDR, in turn, belongs to

ARD, the largest public media company in Europe with a total annual budget of 6.6 billion euros (825 billion yen).

Also, Norddeutscher Rundfunk has operated its Tokyo office since its founding in 1960 without registering as a public corporation in Japan, and for more than half a century has consistently disregarded some legal regulations in Japan, including neglecting its obligation to register with social security (i.e., not registering for pension and health insurance) for locally hired employees due to the lack of company registration.

From the negotiations so far, we have gained the strong impression that the NDR and its correspondents and the staff in charge of the office in Germany are trying to treat local staff according to the German or NDR way of thinking and to suppress them. The Working Rules, which are to be introduced in the office next month without any legal requirement, contain many detrimental changes in working conditions. The rules will be implemented without any concessions despite the protests of all Japanese employees. In general, the introduction of the Working Rules will only apply to Japanese employees. Such unfair treatment, which one could almost call racism, is widespread in the NDR office.

The NDR has declared all harassment by its correspondent as "business instructions" or "duty orders" and is stamping our member who raises objections as a "disrespectful person". Thus the NDR rejected all constructive and peaceful solutions proposed by our member and constantly urged her to negotiate a termination of the employment relationship with severance pay.

Our member is disappointed by the NDR, which did not treat her fairly and equitably and consistently defended the defendant unilaterally. However, out of gratitude for the almost 20 years, she worked there, she excluded NDR as a defendant and only sued the correspondent as a private person who is the direct perpetrator.

As such, the case is only a civil lawsuit against an individual. However, despite the fact that the public broadcaster's budget is largely funded by compulsory broadcasting fees, NDR is expected to continue to invest significant funds for the full legal support of the

defendant.

We believe this is relevant because Japan wants to create a safe and secure working environment free from harassment. This case will be important by requiring foreigners to comply with Japanese social standards as well.

Currently, the NDR is trying to force our member to be dismissed in various ways. Therefore, we can neither announce the correct name nor hold a personal press conference. Hence, we ask that the name of the plaintiff not be published at all.

At the first hearing, our member will speak in court. Besides, the attorneys, Mr. Yoshitatsu Imaizumi and Ms. Yumi Hasegawa, as well as Ms. Megumi Wakiyama, Chairman of Minpororities, and the undersigned Mr. Sadaaki Iwasaki, Secretary-General of Minpororen, will be available for individual interviews in the waiting room after the hearing. An interpreter for Japanese and English is available for foreign journalists.

We hope that you are interested in this case and that many of you will report on it. We are grateful that you will take time out of your busy schedule to do so. Thank you very much.

September 15, 2020

Contact us: Sadaaki Iwasaki, General Secretary, Minpororen Union

Phone: 03-3355-0461 E-mail: info@minproren.jp

Note: This translation is provisional. Please refer to the original text written in Japanese.

ARD パワハラ事件訴訟概要

第1 当事者

- ・ 原告：ドイツ公共放送連盟（ARD）東アジア支局ラジオ部門女性プロデューサー
- ・ 被告：2018年9月1日よりARD東アジア支局ラジオ特派員に着任したドイツ人女性

※ARDは、ドイツ国内にある9つの地方公共放送団体が加盟する組織であり、ARD系列の各局は、世界の約30か国へ約100人の特派員を派遣している。正社員総数は約2万人、総予算は年間66億ユーロ（8250億円）の欧州最大の媒体。日本支局は1960年に開設されたが、法人登記はない。

第2 被告によるハラスメントの経緯

1 被告は2018年9月の赴任直後より、プロデューサーとして約20年もの経歴を持つ原告に対して以下のハラスメントを行った。

会社の支給品であるノートパソコンを使わせない／勤務時間の延長を執拗に要求／出張時の労働時間申告について根拠なく虚偽であると決めつけ非難／共有していた予定について伝えていなかったなどと非難／原告のドイツ語訳を理不尽に非難／その他、一方的決めつけや事実をすり替えた言い分による叱責や非難の繰り返し

2018年9月中旬頃より原告は頻脈症状が現れ医療機関を受診。12月には「不眠、交感神経緊張亢進、頻脈」と診断され、2カ月の休職療養。

2 2019年2月18日復職後もハラスメントが続き、2019年3月1日、原告は東京労働局に助言・指導を申出。東京労働局は被告を含めた支局代表である2名の特派員を呼び出し、①原告の要求事項について話し合いをすること、②企業には従業員に対して良好な職場環境を提供する責任があり、いじめや嫌がらせが起きない社内教育を行うべきであること、を助言・指導した。

3 しかしその後も被告はハラスメントをエスカレートさせていき、原告にはまだ伝授されていなかった技術に対して、原告を糾弾。そのことにより原告は過呼吸症候群を発症し、緊急搬送された。その際も、被告は倒れている原告に対して「なんでこんなところで寝ているんだ」などと言い放ち、スタッフが応急処置をしようとしている間も何もなかった。その後、原告は、過呼吸発作後の全身身体痛により、4月11日から20日まで労務不能となる。原告は被告のハラスメントに対し適切な措置をとるよう北ドイツ放送局（NDR）に再度要求。

4 しかしその後も、被告による以下のようなハラスメントが継続した。

過呼吸症候群を引き起こさせたシーンの再現を強要／原告が取材相手とやり取りしたメールの提出を業務上の必要性もなく執拗に要求／録音機材を隠したり、業務オーダーを原告が入手し難い場所へ置くなどの業務妨害／社内社外コミュニケーションの中で、原告のみを姓名頭文字のアルファベットに省略して呼称／頻繁に原告の職務経験を否定／同僚の前で事実と反する内容に対して原告を叱責／終業時刻の一方的延長通告

- 5 以上のような連日のハラスメントにより原告は、再度「不眠、交感神経緊張亢進」と診断され、2019年7月5日から12日まで労務不能となる。しかし更にその後も被告による以下のようなハラスメントを継続した。

所定外労働時間の抹殺／経理担当者に原告が支払った経費を支払わせない／任務外の雑務強要／労働時間の一方的不利益変更／原告のみに指紋認証勤怠管理機器の使用を強要／虚偽の業務時間記録を休暇中や週末に簡易書留で原告の自宅へ送りつける／原告宛ての郵便物を勝手に開封／勤務時間開始前から連続的に嫌がらせメールを送りつける／理不尽な帰宅命令

- 6 2020年2月10日、被告は原告に対してわずか30分間に11通の嫌がらせメールを送信。不可能な業務デッドラインと追い込みがあり原告は心臓に痛みが生じ緊急搬送。心的ストレスによる心臓神経症、不安障害、蕁麻疹の診断を受け、2週間の療養。被告は同僚と消防隊員に対して、自分はインタビューをしていたために、原告に何があったのかさっぱり見当がつかないと虚偽の説明を行う。

第3 訴訟で請求しているもの

本件訴訟では、被告による原告に対する上記の一連の精神的な攻撃や仕事の妨害は原告の人格権を侵害する違法なパワーハラスメント行為であるとして、民法709条に基づき合計605万8739円（治療費7万7019円、休業損害43万1720円、慰謝料500万円、弁護士費用55万円）を請求している。

※本件訴訟の代理人

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-4 四谷駅前ビル

東京法律事務所 Tel.03-3355-0611 Fax.03-3357-5742

弁護士 今 泉 義 竜
同 長 谷 川 悠 美

注) なお、原告の氏名については一切公表しないでください。

Summary of the ARD Power Harassment Case

I. Parties involved

Plaintiff: Female Producer of the ARD East Asian Broadcasting Office Tokyo

Defendant: German woman, who took up the post of correspondent at the ARD East Asian Broadcasting Office Tokyo on 1 September 2018.

ARD is the holding organization of nine regional public broadcasters in Germany. Each ARD station sends altogether about 100 correspondents to 30 countries. With a total of 20,000 full-time employees and an annual budget of 6.6 billion euros (825 billion yen), it is the largest public media organization in Europe. The office in Japan was opened in 1960 but is not registered as a public corporation.

II. Details of harassment by the defendant

1. Immediately after taking up office in September 2018, the defendant committed the following harassment against the plaintiff, who has been working as a producer for about 20 years:

Prohibition to use her company laptop / Persistent demand for extension of her working hours / Insinuation and baseless accusation that she misrepresented her working hours on business trips / Allegations that she did not disclose information from shared tools / Inappropriate condemnation of the quality of her translations from Japanese into German / Repeated other reprimands and accusations based on one-sided assumptions and misrepresentations of facts

In mid-September 2018, the plaintiff began to feel palpitations and sought medical help. In December she was diagnosed with "insomnia, sympathetic nervousness and palpitations". The doctor prescribed a two-month leave of absence for medical treatment.

2. After returning to her workplace on 18 February 2019, the harassment continued. On 1 March 2019, the plaintiff requested advice and guidance from the Tokyo Labor Office. It called two correspondents as branch representatives, including the defendant, and ordered that (1) the claims of the plaintiff should be discussed and (2) companies have a responsibility to create a good working environment for their employees and provide internal training to prevent harassment and harassment.

3. However, the defendant subsequently escalated her harassment and denounced the plaintiff for techniques she had not yet been taught. This resulted in the plaintiff developing hyperventilation and being taken to the emergency room. At the time, the defendant said to the plaintiff who had fallen to the ground, "Why are you lying here?" and did nothing while other staff members tried to provide first aid. The plaintiff was then incapacitated for work from April 11 to 20 due to whole-body pain as a result of the hyperventilation attack. The plaintiff again called upon the Norddeutscher Rundfunk (NDR) to take appropriate measures against the harassment of the defendant.

4. The following harassment by the defendant continued, however, also afterward:

Forcing her to re-enact the scene that caused the hyperventilation / Continually demanding, with no business need, to present the email exchanges with interview partners / Interfering with her work by hiding recording devices and filing written work orders in places, which were difficult for the plaintiff to access / Abbreviation of her name with the first letter of her first name and surname in internal and external communications / Frequent denial of the plaintiff's work experience / Reprimanding her in front of colleagues with untrue statements / Unilateral extension of the plaintiff's working hours.

5. As a result of the daily mobbing described above, the plaintiff was again diagnosed with "insomnia and sympathetic hypertension" and was again unable to work from July 5 to 12, 2019. After that, the subsequent harassment of the defendant continued stubbornly, though.

Cancellation of registered overtime / Order to the accountant not to reimburse expenses paid by the plaintiff / Compulsion to perform various activities outside of her regular work area / Unilateral adverse changes in her working hours / Compulsion to use a time recording device for fingerprint authentication only by the plaintiff / Sending of false records of working hours by registered mail to the plaintiff's private address during her vacation or on weekends / Unauthorized opening of mail addressed to the plaintiff / Sending of continuous harassment mails even before the start of working hours / Unjustified order to return home early.

6. On 10 February 2020, the defendant sent 11 harassing e-mails to the plaintiff within only 30 minutes. The set deadlines were impossible to meet. The exerted pressure caused the plaintiff's heart to ache and she was taken to the hospital by ambulance car. She was diagnosed with cardiac neuropathy, anxiety disorder, and urticaria due to psychological stress, and she was again unable to work for two weeks. The defendant gave employees and firefighters the false representation that she had no idea what happened to the plaintiff because she was busy with an interview all the time.

III. Claims in this action

The above-mentioned series of psychological attacks and disturbances of work by the defendant against the plaintiff is an illegal act of power harassment that violates the plaintiff's personal rights. Based on Article 709 of the Civil Code, a total of 6,508,739 yen (70,019 yen for medical expenses, 431,720 yen for loss of work, 5,000,000 yen compensation, and 550,000 yen for attorney's fees) is being sought.

The name of the plaintiff cannot be published.

Note: This translation is provisional. Please refer to the original text written in Japanese.

Lawyers for this lawsuit

Yotsuya Ekimae Building, 1-4 Yotsuya, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0004, Japan

Tokyo Law Firm Tel: 03-3355-0611 Fax: 03-3357-5742

Lawyers: Yoshitatsu Imaizumi and Yumi Hasegawa